

2022年度 個人研究実績・成果報告書

2023年4月14日

所属	国際教養学部	職名	准教授	氏名	ムズラックル ハリト
研究課題	メッダーフルックの構造				
研究キーワード	話芸、落語、メッダーフルック、口承文芸	当年度計画に対する達成度	1.目標を超える研究の進展・成果を達成した		
関連するSDGs項目	10.人や国の不平等をなくそう	16.平和と公正をすべての人に	該当なし	該当なし	

1. 研究成果の概要

本研究では、メッダーフルックに関する限られた文献や映像資料を通して、メッダーフルックの構造分析を行った。導入部から結末まで一定の法則に従って漸が進められる点、語り手の語り口や演技方法、小道具の使い方においてメッダーフルックと落語に共通するものがあることが明らかになった。

メッダーフルックと落語の成立に「宗教性」が大きく関与しているという点においても共通していることを検証した。そもそも世界初期演劇には、ギリシャ悲劇、中世ヨーロッパの受難復活劇や中国の儺戯(だぎ)など、宗教的祭祀がその起源となっているものが多い。言うまでもなく宗教的な儀式が日本の能の発生とも深い関係にある。能には祈りを込めて演じられる演目「翁」があり、芝居の最後には「付祝言」という神に捧げる謡があるなど、宗教文化を強く反映している。宗教と伝統芸能の深い関係は世界共通であることを物語っている。

落語の源流の一つは、仏教の説教にあるとされ、同じような傾向がトルコの話芸にも見出される。一方で現代に継承されている話芸としては、メッダーフルックと落語の違いが顕著である。メッダーフルックは、時代の経過とともに宗教色が薄れ、市民の実生活を反映する話芸へと変容したが、イスラム教の関与を示す要素はその構造や様式に刻まれている。落語の場合、落語家が冒頭で口にする決まり文句は、主に聴き手への感謝の気持ちを表すのに対し、メッダーフルックでは神を意識して口演の無事を祈る礼式として表れる。ただし、正座という神への祈りを捧げる際の座り方は、メッダーフルックにおいては、椅子の使用へと変容を遂げた。日本でも日常生活では椅子の使用が主流ではあるものの、法事や茶道、華道などにおいては未だに正座が基本の形態である。落語においても正座が時代を超えて伝承される「型」として定着している。現代の日本人は日常で着物を着て正座をする機会がほとんどないにもかかわらず、落語という芸能においては、着物で正座という型は破られることなく受け継がれている。

文字で書かれた作品や複数の役者によって演じられる舞台演劇と違って、ひとりの演者が語る話芸には、観客の想像力をかき立て、次第に物語の世界へと引き込むためのテクニックが必要である。とくに、テレビや映画、インターネット動画が発達した今日では観客が眼前には存在しないドラマの世界や登場人物を想像する力が弱まってきているかもしれない。そのような中において、落語はなぜ今もなお安定的に観客を魅了し続けているのだろうか。東京に4軒残る寄席の公演形態や観客に人気の演者や演目、寄席を取り巻く環境などを現地調査することを通じて、時代を超えて存続する落語についてさらに研究を深め、トルコで衰退しつつあるメッダーフルックの話芸としての魅力を後世に受け継いでいくための環境づくり、後身育成方法などについて研究することを今後の大きな目標としたい。トルコ国内にとどまらず、日本をはじめとする世界各国にメッダーフルックという話芸の存在を紹介することにも専心したい。

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

「メッダーフルックの構造 —メッダーフルックと落語の類似点の考察—」MIZIRAKLI HALIT、日本笑い学会、笑い学研究、29号、17-26頁、2022年。

【著書・論文（査読なし）】

- 【学会発表等】

3. 主な経費

主な個人研究費は、図書や映像資料、学会費、消耗品、文房具などでした。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

(本文は2ページ以内にまとめること)